

## 第9回愛と義のまち米沢エッセイコンテスト受賞作品

### 金 賞

#### 「母の人としての優しさ」 兵庫県 徳沢 彩さん

私の母は今は専業主婦ですが、それまでは郵便局に勤務していました。私が通っている学校から母の仕事場は歩いて15分程度だったので、時々母の仕事場の隣にあるコンビニで待ち合わせして帰ることがありました。

ある雨の日、いつも通りコンビニの外で母を待っていました。雨にもかかわらず、郵便局には沢山のお客さんが出入りしていました。すると、中で働いているはずの母がかさをさして郵便局の駐車場に出てくるのが見えました。隣には年配の方がいたので何かなと思って見ていると母は片手に持っていたもう1本のかさを開き、それをその方にさしてあげて、その方が車の中に入るまで濡れないようにしてあげていたのです。母は何もなかったかのように中に戻っていき、また数分後に出てきて違う方にも同じようにしていました。

少し日が経ってまた一緒に帰る約束をして、その日は私はATMに用があったので中に入って用を済ませて外に出ようとした時、母の顔が見えたので手でも振ろうかなと少し見っていました。母はこちらに気付かず接客をしていました。私はその様子に思わず涙を流しました。とてもにこやかに丁寧な接客をしていたからです。

あの雨の日だけでなく、毎日変わりなく人に優しく接していることに感動しました。

人はそれを上辺だけなどと思うかもしれませんが、しかし、私は家での母も見ているのでそれが偽りでないことはすぐに分かりました。母はいつも私に「口角を上げて笑って人のために何かをしてあげること。一日一善!!」と言います。母の姿を見てその教えがとても大切なことだと理解できました。

人にそのように接すればその相手だけでなく、その周りも良い気分になるのだと思いました。

私も4月から社会人。母のようなすてきな大人に近づけるように日々努力をしたいです。

## 銀 賞

「ガソリン」 福島県 鈴木 篤夫さん

東日本大震災後の原発事故により、私と娘は福島県郡山市に避難した。

市内のガソリンスタンドには、いつ販売されるか分からないガソリンを求めて車の長い列が作られていた。その頃、ガソリンはどこにもなかった。自宅の様子を見に行くため、私も早晚この列に並ぶのかと思うと心が萎えた。

ある日、娘が「スマホに、ガソリンを分けてあげるといふ人がいるよ」と言った。その人は山形県在住で、明日、福島の人達のためガソリンを積んで行くので昼前には郡山近辺を通る。待ち合わせようとのことだ。

「そりゃあ危ない、やめたほうがいい。高いお金を要求されるよ」と私は応えた。「でも、もう連絡しちゃった。明日会うことになっている」と娘は舌をペロッと出した。

私も一緒に待ち合わせ場所のスーパーに行った。駐車場で、サーファー風の日焼けした若い男が寄ってきた。私はぎこちなく挨拶をする。二トントラックの助手席から、同じように日に焼けた若い女性が赤ちゃんを抱いて降りてきた。相手が若い夫婦者と分かりホッとした。若い男はガソリンを移し終わると「もっとあげたいんですが、あとは友達の分なので、すみません」と頭を下げた。

「有難うございます。助かりました。これは少しですが」私は五千円札を出した。ガソリンスタンドに並ぶことなく二十リッターが手に入ったのだ。これでも安いくらいだ。

ところが若い男は頑として受け取らない。二三度押し問答をしてから若い男は「この分で、震災で困っている人に何かをしてあげてください」ときっぱりと言った。奥さんも赤ちゃんを抱きながら「こういう時はお互い様です。パパの言うとおりにしてあげてください」とニコリ笑った。「じゃあ、仲間が待っていますので」

二トントラックは爽やかに走り去った。あれから九年。いまだに私はあの時の恩を誰にも渡せないでいる。

## 銀 賞

### 「郷里を誇る先輩」 埼玉県 安部 直さん

暮れのスーパーは大変な人混みになる。人をかきわけて買い物をしなければならぬほどだ。そんな中で、思わぬ出会いがあった。買い物をして会計を済ませて帰るときだった。足を滑らせて転んでしまった。なかなか立ち上がれない。品物は通路に散らばっている。人は多いが、誰も振り向いてくれない。そのとき、「大丈夫ですか。あれ・・・安部君じゃないか」声をかけてきた顔を見て驚いた。

大学で二年先輩のTさんだった。彼と会うのは、何年ぶりだろう。同じ市内に住んでいるとは知らなかった。

Tさんは散らばっている品物を一つ一つビニール袋に入れて、うずくまっている私に「肩につかまれ」と手を貸してかしてくれた。それから車で自宅まで送ってもらった。

それで思い出した。Tさんから助けられたのは、今回で二度目だった。

一回目は、大学時代だ。アパートが隣り部屋で親しくなった。ある日、「鍋を貸してくれ」とTさんが来たとき、私は熱を出して寝ていた。「熱を計ってみろ」と自分の部屋から体温計を持ってきてくれた。「三十九度もあるぞ。寝ていろ。オレがお粥を作ってやる」「先輩は、明日、就職試験があるんでしょう。勉強してください。ボクは大丈夫ですから」遠慮しながらいうと、「そんなことは心配するな。肺炎になったら、どうするんだ」親身になって看病してもらったことを思い出した。

この昔話をTさんに話すと、「えっ、そんなことがあったけ・・・アッハハハ。今日は、車を置いていくから、いっしょに飲もう」

それからは、昔話に花が咲いた。「先輩は、確かテレビドラマになった「天地人」の米沢の出身ですよ」

「そうだよ。謙信公の愛と義の精神は、いまも米沢の誇りだよ」郷里に伝わる風習や言葉などを熱心に語ってくれた。

もしかして、困っている人を見ると黙っていられないTさんの性格は、米沢の伝統が育てたのかもしれない。

話を聞いているうちに、一度米沢にいつてみたくなった。

## 銀 賞

「店主がくれた「よ～し！もう一度」」 兵庫県 原 八千子さん

元気印を自負して、何事にも精神的であった夫が突然脳梗塞で倒れ、右手、左足に麻痺が残った。突然の体の異変をなかなか受け入れられず、医者に勧められたリハビリもせず、じっと考え込んでいることが多くなり、精神的にも落ち込んでしまった。

私は「このままではいけない」と思っても、ただ機嫌を損ねないように暮らすのが精一杯の日々であった。

そんなある日、テレビで珈琲のコマーシャルを観た夫は「神戸のあの店の珈琲の味が懐かしいなあ！」と呟いた。「そうだ。夫の珈琲好きを生かせるかも？」と思い、「珈琲を飲みに行こう」と誘ってみたが「こんな格好では無理だ」と、乗り気ではない。以前よく歩いた街の話が話題になっている内に、やっと「行ってみようか」という言葉が出てきた。私は涙が出るほど嬉しかった。気の変わらぬ内に即実行！。

杖での一人歩きは無理なので、私が夫の手を握って体を支えながら、商店街をゆっくりと歩いた。目指す珈琲店にたどり着いた時には、二人とも感無量であった。店の人は、夫の様子を見ても深くは尋ねず「暫くぶりですね」とさりげなく迎えてくれた。そして「あれでいいですね」と、夫の好みの珈琲を煎れてくれた。「ああ～、この香り！この味！」夫は満面の笑みで店主を見つめた。

人目を気にしていたはずの夫が、発病以来今日までのことを店主に話し始めた。店主は自分から意見を言わず、夫の顔に目線を合わせて、「うん、うん」と頷き相槌を打つだけであるのに、堰を切ったように話す夫の顔は以前の顔に戻っている。店主の心遣いの奥深さを感じた。この店を鼻屑にして通っていた夫は、珈琲の味だけではなく、店主の人柄にも惹かれていたのだ。店主の心の温かさとそれをブレンドしたような深みのある味に支えられての「歩くりハビリ」は続いている。

## 銅 賞

### 「親切にされたちょっといい話」 石川県 夷藤 愛弓さん

私の地元、金沢の主な公共交通機関は北陸鉄道バスです。私は、この北鉄バスの運転手さんの温かな思いやりに元気を頂いています。

バスに乗車しても、なかなか発車しません。ふと見ると、運転手さんは鏡ごしにある老人の姿を穏やかに見守っています。私と一緒に乗車したおばあちゃんが、ゆっくりと腰を降ろし前を向く様子を確認していたのです。その上で、明るい声で言いました。「発車します。」バスは、信号で止まったり、右折、左折を繰り返しながら街を巡ります。その度に、「止まります。」「バス動きます。」「右、曲がります。」「左、曲がります。」と、乗客に注意を促してくれます。

金沢は、五年前の北陸新幹線開業に伴い、多くの外国人旅行者が訪れる様になりました。ホテル開業ラッシュも手伝い、街は一気に国際色豊かになってきています。バスに、外国人旅行客が乗って来ました。運転手さんは、日本語に加えて英語で案内を始めました。「このバスは、〇〇行きです。」「〇〇ホテルに行かれる方は、こちらで降りられると便利です。」

その流暢な英語に、思わず聞き入ってしまいました。ふるりの街が賑やかに発展していく喜びがじわっと心に広がりました。

ある停留所で、小学生が降りていきました。「ありがとう。」運転手さんは、明るい声で答えます。「ありがとうございました。」次の停留所で、複数の大学生が降りていきました。みんな口々に言いました。「ありがとう。」運転手さんは、ひとりひとりに笑顔で答えていきます。「ありがとうございました。」

なんて素敵な空間でしょう。乗ってきた人への配慮、乗っている人への配慮、降りて行く人への配慮が行き届いているのです。運転手さんの声に、みんなが耳を澄ましているのがわかります。不思議な連帯感と幸福感を乗せてバスは進んでいきます。

いよいよ、私が降りるバス停が近づいてきました。もう少し乗っていたい気持ちを抑えて、私は笑顔で言いました。「ありがとう。」運転手さんも笑顔で答えてくれました。「ありがとうございました。」

バスを降りると、心の中をスッと爽やかな風が吹きぬけていきました。まるで、映画の感動作を観た後のような気分になりました。

自分の仕事に誇りを持ち、命を安全に運ぶだけでなく、出会う人々の気持ちに寄り添い小さな明かりを灯してくれる、この運転手さんに心から感謝すると共に、これからも元気で活躍される事を心からお祈りしています。

## 銅 賞

### 「応援」 兵庫県 笹野 優希さん

私が陸上で長距離をしていたとき、駅伝大会のコースを試走する機会が何度もありました。初めて試走をしたとき、走っている最中に他校の選手とすれ違いました。私は相手をライバルだと思っていたので、挨拶をしませんでしたが、相手は私に「ファイト」と言ってくれました。私はその瞬間に、自分が恥ずかしくなりました。相手は私のことを、ライバルだけど同じ競技をしている仲間だと思ってくれているのに、私はただライバルとしか思っていなかったからです。

同じようなことが駅伝大会当日にもありました。ある学校が、自分の学校の選手だけでなく、他の学校の選手にも応援していたのです。この大会まで、沢山の練習をし、苦しみを味わってきたのはどの学校も同じだから、学校が違うから、ライバルだからという理由で、他校の選手は応援しないという考えは、その学校にはないようでした。

それ以来、私は他校の選手にも「ファイト」と言ったり応援するようになりました。誰にでも応援の言葉をかけることは大事だと思ったからです。応援された人は、「自分もまた別の人に応援の言葉をかけよう」と思うように、次々と輪が広がっていくと思います。私は実際に他校の人から「ファイト」と言われたことで、もっと頑張ることができました。応援しようという気持ちは、沢山のの人に伝えるべきだと思います。相手の気持ちだけでなく自分の気持ちもよくなると思います。

もしあの時、「ファイト」と言ってもらえなかったら私は応援することの大切さに気が付けませんでした。これからも、頑張る人に応援して、私もまた応援してもらえるように、色々なことに挑戦して頑張ろうと思います。

## 銅 賞

### 「高校生の大きな背中」 山形県 山王堂 恵偉子さん

3年前の11月のひんやりとしてきた、ある日の夕方。私は5時17分の電車に乗るために焦って走っていた。両手に大きな荷物をもって駅に向かって走っていた。前方を7～8人位、高校生が部活帰りでゆったりと歩いていた。追い越しながら、「何分に乗るの」と聞くと「17分」と言った。「私は間に合わないわ」と言いながら高校生の前を必死で走った。「荷物、持ってあげるか」と声をかけてくれた。「大丈夫、頑張る」と走っていると追いかけてきて荷物をもってくれた。「ありがとう」と言いながら走っていると、一人の男の子が私の前にしゃがみこんだ。「あばれ」と両手を後ろに出した。「大丈夫 走っから」「そんなこと言わないで、いいから」と背中を向けたので、おぶさった。コートを着ていたので、“ズルッ”と落ちた。「しっかりつかまってる」と言い、私を背負ってダッシュで走った。「どこまで行く？切符、買っておくから」と2人が走った。「電車を止めておく」と他の2人が猛スピードで走っていった。300m位走り駅についた。駅の階段を登るとき、「大丈夫、ゆっくり」「転ばないで」と両脇に付き添ってくれた。ぎりぎり間に合った。荒い息で「ありがとうございます」と言うと、彼らもハアハアしながら「俺たちもいつもだから（ぎりぎりに走って乗る）」と何もなかったような顔をしていた。

沢山の荷物を持って走る年寄りを見て、大変そうだなと思った一人の言葉が、他の子どもたちの行動の誘い水となっているのです。何をどのようにすればよいか、彼らの瞬時の判断と行動は、彼ら自身の中から沸き上がってきた本当の優しさだったのです。電車を停めておく、そんなことができるわけがないのに、そうしようととっさに思いついたことも、何かしてあげたいという思いからのものなのです。

年をとるのも悪くない、こんな若者がいる社会なら。

いたわってもらえる幸せと、いたわることができる幸せが、秋の夕べの空気を温かくしてくれたようでした。

## 銅 賞

### 「国が違えど」 兵庫県 高瀬 朋花さん

高校一年生の夏、友人と二人でフィリピンに1ヶ月間留学に行くことになった。海外に行くことは初めてではなく、特に心配事もなく旅行に行くような気分で友人と日本を発った。入国も無事にすませ、空港を出た私達はさながら勇者のような気分だった。自分の力でたいはいのことはできる、大人の仲間入りをしたような気でいた。留学生として滞在する時間は飛ぶように過ぎていった。拙いながらも英語でランチを注文したり、店で買い物ができる程になり、友人や語学学校での仲良しの先生もできた。案外子供でも一人で生きていけるな、などと呑気に話していたある日、友人が腹痛をうったえはじめた。顔色も悪く、とても健康には見えなかった。薬を飲もうにも何を飲むべきか分からない。何もできない状況に私は焦った。電子辞書をつかむと、寮のスタッフルームに駆け込んだ。辞書を頼りに何とか友人の体調が悪い事を伝え助けを求めた。すぐにスタッフの1人が救急箱を取りに走った。他のスタッフの人達は、拙い英語で必死になっている私の話をちゃんと聞いてくれた。そして日本語で「ダイジョウブ」と声をかけてくれた。久々に聞く日本語に驚いたが、それのおかげで安心できた。友人が数日入院することが決まり、病院まで荷物を運ぶ事になった時、スタッフの人々は自分達の仕事を放り出し、手伝いをしてくれた。タクシーの運転手に、この子は日本人で友人の為に病院に行くから、安全によろしく頼むと伝えてくれた。タクシーの中で運転手は私に沢山楽しい話をしてくれた。少しでも私が笑うと、「そうやって笑っていれば良い事がある」と言ってくれた。運転手は目的地より前でメーターを止め、着いてから降りる私に「グッドラック」と言った。異国での人々の優しさの連鎖に心をうたれた。言葉が違えど国が違えど、他人に優しくする事の大切さを改めて知った留学になった。今でもフィリピンに続く青空を見上げると、あの日を思い出す。

## 銅 賞

### 「お地蔵さん」 京都府 栗本 柚羽さん

学校への通学路の途中には、お地蔵さんがいる。今までの私は、登校中気にも留めることなく、目の前を通り過ぎていた。

その出来事が起きたのは、通学路に淡い橙色が差し始めた時間の、ある日のこと。私は一人、足早に駅へ向かっていた。その時、毎日見る同じ光景の中に、一つだけいつもと違うものが目に映った。何かに向かい、手を合わせ、静かに目を伏せるおばあさんがいたのだ。何をしているのだろうか、と不思議に思い、私はその場に立ち止まった。するとおばあさんは、その丸くなった腰をさらに曲げ、一礼するとそこから立ち去って行った。私はおばあさんがいた場所へ行き、何を拝んでいたのかを確認した。

「あっ。」思わず、驚きの声が漏れた。そこには、いつも横目で見るだけの、お地蔵さんがいたのだ。私は衝撃を受けた。なぜか、そう問われると、その時の私は言葉に表すことができなかった。

その日を境に、私は毎日お地蔵さんとその周りを注視するようになった。そして気づいたことがある。一つは、あの日見たおばあさん以外の地域の人たちも、お地蔵さんの前を通ると手を合わせる。もう一つは、お地蔵さんの周りに飾られている花は、枯れていることがないということだ。

私はこの光景を見る度に、あの日言葉に表せなかった気持ちがまるでパズルのピースのように組み合わさっていった。

このお地蔵さんはきっと、この地域の守り神様なのだろう。そしてこの守り神様を地域の人たちはとても大切に、愛しているのだと思う。私はこの地域をすばらしいと感じた。なにが、と問われれば、そう、地域の神様を尊ぶこの日本らしい文化が。私も地域の人たちに倣い、静かに手を合わせる。お地蔵さんが、ほほえんでいた。